

# 積丹町における教育・研修旅行の体験型メニュー(夏季・厳冬期・海外向け) 50種類の開発

プロジェクト代表者: 八木 宏樹(商学部一般教育)

- 本プロジェクトは、学生と教員が協働して積丹町における実現可能な体験型ツアーを構築するというプロジェクトです。
- まず、学生は資源活用可能な積丹町内の遊休施設調査を行い、教員は全学的な大規模授業で積丹半島振興策のレポートを課して538件の提案を得たのち、その実現性について検討しました。学生提案の主なものは下記のグラフに示しました。
- 一方で、首都圏住民の積丹町に対するニーズ資料がなかったことから、教員・ゼミ学生は共同で東京の北海道物産展においてアンケート調査を行い、さらに内容を詰めました。それらをとりとまとめ、最終的に首都圏のニーズについての結果と8件の具体的な提案をまとめました。



積丹町(余別地区)で勉強会をしました。



使われていないホテルなど遊休施設調査を行いました。



漁師さん方への聞き取り調査も行いました。



東京の物産展ではブースに立つ体験もしました。

## 学生が考える積丹地域振興



## 具体的な取組内容

大規模授業である基礎科目(教養科目)の「生物学Ⅰ」をCOC対応型とし、学生は「積丹半島の水産生物学」を15回にわたって学びました。その上で、試験とは別に積丹半島の振興策のレポートを課して538件の提案を得ました。積丹町等への情報を望まない学生を除いて、教員は内容を精査し、実現可能な提案をとりとまとめました。それらの内容については左記のグラフに示してあります。一方で、首都圏住民の積丹半島観光に対するニーズの資料がなかったことから、生物ゼミナールでは教員・学生共同で「Made in 北海道」(北海道物産展)の積丹町ブースにおいて、首都圏住民に対してアンケート調査を行い、175通のアンケート結果を得ることができ、これを用いてニーズ解析を行いました。これらの結果をまとめて、生物ゼミでは8件の積丹町振興策を構築しました。

## これまでにかわかったこと、次の課題

- ・学生からの提案では漁業・水産加工体験、SNSの有効活用、ご当地キャラクターの製作、B級グルメによる地域振興、漁師と一緒に釣り体験、祭による魚介類のアピール、マンガやアニメを利用した地域振興、地域魚類のブランド化などが上位を占めています。
- ・一方で、首都圏でのニーズ調査からは、アンケート回答者175名のうち、北海道旅行のリピーター率は58.86%に達するものの、北海道を訪れたにもかかわらず積丹町を訪問をしたことがない人たちが約7割を占め、また、「積丹町を知っているか」の間に対しては、半数以上がほとんど積丹町を知らなかったことが判明しました。このため、積丹町ツアーを提供する以前に、「積丹町を知ってもらう」、「何とか一度来ていただく」方が必要になってきます。
- ・学生からの振興策の提案は「何かを提供する」のが主となっていますが、ニーズ調査からは、首都圏住民が積丹町に求めるのは、第1位が「大自然の満喫」で、この部分で提供する側と訪れる側で齟齬が見られます。首都圏住民の第2位は「地域の料理」で、学生提案でも上位を占めており、この点では学生提案も首都圏住民に受け入れられる要素が十分にあります。
- ・アンケート結果からは、「札幌雪祭りなどのイベントに絡めて、1日程度のオプションツアーがあれば積丹町に行ってみたい、その金額は1万円以下」という傾向が見えますので、学生提案のツアーにしても、これらのニーズに合致したプログラムを構築することが重要であると考えます。
- ・美味しい積丹町へのオプションツアーについては「1泊2日程度」と回答した住民も3割程度に達しており、これらの人たちは「2~3万円の出費でもよい」としているため、今後はさらなる解析を行って、年代別、性別にそれぞれターゲットを絞ったプログラム構築が必要です。